

今回は、最上川舟運の代表的な積荷だった青苧について、その使われ方を、大谷の志藤富男さん、白田千代志さん、堀敬太郎さんより教えていただきましたのでご紹介いたします。

朝日町宝ノート No.0702

じいさんが青苧を栽培して製品化して出荷していた。いつも胸元にカスがいっぱい付いていたのを覚えているな。

青苧は水にも強く丈夫だったので、一般家庭では主にひもや綱として使っていた。貴重なものだったから、使っていたのは売り物にならない色の悪いものや、はいで残った表皮を利用していた。

私の家では、馬の手綱（馬のくつわに付けて引く綱）としても使っていた。藁では馬の力ですぐ切れてしまうから、青苧でないとダメだった。1本2間から3間くらいをなって使っていた。御神楽の天狗のひげにも使っていたな。青苧は白くて先の方が細くなっているから、櫛でかつぐと、いい感じになったんだ。それから、水道工事をしている地元の鍛冶屋さんがよく貰いにきてた。水道から水が漏れないように、ネジに巻いて締めてパッキン代わりに使っていたんだ。（志藤富男さん）

綿代わりとしても使っていたな。皮をはいで残った表皮（一番上の表皮）を水に浸しながら叩いて伸ばし、広げたものを乾燥させ綿の代用品として布団などに利用していた。昔、兵士として出征する時には日の丸の旗を立てたが、その登り竿のひもも青苧で作っていたな。鯉のぼりにも使っていた。うちには青苧でなつたたこ糸も残っている。藁のように何さもかにさも使うと「ほだなさ使うな」とごじゃがれたものだった。



左より 堀さん、志藤さん、白田さん

「青苧の使われ方」

この辺りでは、皮をとった茎の木の部分を“からむし”と呼んでいた。それは茅葺屋根の軒先のかたい部分に使っていた。家を壊した時に屋根の中からすこだま出てきた。

（白田千代志さん）

江戸時代から明治時代にかけて朝日町の代表的な一大産業だった青苧は、衣料の原料として何百両という取引が行われていた。年貢として納めていた家もあったほど珍重された物だったから、一般家庭では何にでも使えたという訳ではなかった。

私たちが子どもの時代には、ごく一部の人が作っていなかった。うちでも作っていなかったから、青苧糸を束で買ってくるものだった。やはり一番は、ひもや綱として使っていた。下駄の鼻緒などにも使ったりしていた。今みたいにビニールひもなんてなかったから、一般家庭において青苧はなくてはならない貴重な生活必需品であった。

それから、からむしを乾かしたものに硫黄を先に少しつけて、釜戸などに火をつける“付木”としても使っていた。よく燃えるから、火種としてとても重宝していたんだ。

農家による青苧生産は栽培から「日干苧」として出荷するまでで、青苧糸を使って布を織るということはなかった。（堀敬太郎さん）

取材日 / 平成 19 年 8 月 22 日

取 材 / 柴田圭一

プロフィール

- | | |
|---------|----------------------------|
| 志藤 富男さん | 昭和 3 年生。農業 大谷六在住。 |
| 白田千代志さん | 昭和 3 年生。農業 大谷五在住。 |
| 堀 敬太郎さん | 昭和 3 年生。エコミュージアム案内人。大谷一在住。 |